令和３年度　下関市立考古博物館協議会　会議録

日　時　令和４年２月 14 日（月曜日）13：30～15：30
会　場　下関市立考古博物館　講堂
出席者　委員　渡辺一雄(会長)、河波茅子(副会長)、藤丸詔八郎、山内紀嗣、田中晋作、小戸毅、冨士本武明、木原豊美、近藤洋平
下関市教育委員会教育部教育長　児玉典彦
事務局　濱崎真二(館長)、沖中真志(課長補佐)、小林善也(主任(学芸員))、中山元智(学芸員)、奥野正人(会計年度任用職員(学芸員))、藤山佳子(同)、巽優貴(同)

小林　　定刻になりましたので、ただいまから令和３年度下関市立考古博物館協議会を開催いたします。まず、お手元にお配りした配付資料の確認をさせていただきたいと思います。

最初に、本日の協議資料になりますが、１部お手元にございますでしょうか。続きまして、下関市産恐竜卵化石の小さい解説冊子をお付けしております。それからもう１つ、「掘ったほ！下関 2021 改」とあります、現在展示しております展示解説の冊子となります。「季刊考古学 158」、綾羅木郷遺跡に関するトピックが載っている資料になります。「博物館研究」の 2021 年 12 月号、当館に展示されております恐竜卵化石のコレクションについて報告させていただいている資料がございます。それから、あとクリップでまとめておりますが、クラウド型収蔵品管理システムのチラシ、「発掘された山口－山口県埋蔵文化財センター巡回展－」のチラシ、夏の体験学習の参加者募集のチラシ、「掘ったほ！下関 2021」のチラシ、「遺跡 de あーと　表現しよう！古代のしものせき」のチラシ、同じく応募作品展の開催のチラシ、現在開催しております「掘ったほ！下関 2021 改」のチラシ。それから、これは市立美術館のほうで開催したグループ SYS の展覧会ですが、「潮流・下関 2021」のチラシ、最後が「点つなぎ」の見本を参考資料としてつけさせていただいております。以上が本日お配りする資料となりますけれども、漏れなどございませんでしょうか。皆様よろしいでしょうか。

（資料不足なし）

小林　　それでは、まず初めに、下関市教育委員会を代表いたしまして、児玉教育長がご挨拶を申し上げます。

児玉　　皆さんこんにちは。下関市教育委員会教育長の児玉でございます。

それでは令和３年度下関市立考古博物館協議会の開催にあたり一言ご挨拶を申し上げます。

皆様には平素から考古博物館の運営につきまして、格別のご支援、ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。また、本日は新型コロナウイルス感染症の蔓延するなかでご参集いただき、感謝申し上げます。

さて、考古博物館は平成７年の開館から今年で 27 年目を迎え、開館以来の入館者は１月末日までの累計で 67 万 267 人となりました。入館料を無料にした平成 15 年度以降は、年間２万２千人から２万５千人の方々に来館をいただいておりましたが、令和元年以降の感染症の流行により、臨時休館はもとより体験学習、講演会等の規模縮小を余儀なくされ、博物館運営に対し多大な影響を受けているところです。本日は未曽有の状況であります考古博物館の運営状況や今後の活動計画についてご報告を申し上げるとともに、今後の博物館の在り方や課題解決までの取り組みについてご議論をいただき、また市民に認められる博物館として、その役割を果たすためのご助言を賜りたいと考えております。どうか委員の

皆様には考古博物館の運営全般につきまして多角的な視点から十分にご協議をいただき、当館はもとより本市博物館行政のさらなる充実のために積極的なご意見、ご提言を賜りますようお願い申し上げます。本日はどうぞよろしくお願いします。

小林　　それでは、下関市立考古博物館協議会委員の任期が昨年７月 31 日までとなっておりましたので、引き続き、８月１日から令和５年７月 31 日までの２年間を任期とする委嘱状を交付したいと思います。渡辺委員から反時計回りに手交させていただきますので、その場で教育長からの委嘱状の交付を受けていただきたいと思います。

（渡辺委員、藤丸委員、山内委員、田中委員、小戸委員、冨士本委員、木原委員、近藤委員、河波委員に委嘱状を渡す）

小林　　それでは次に本日出席の職員の紹介をさせていただきます。

（各職員の紹介）

小林　　それでは、本日の協議会の出席状況を報告いたします。委員総数９名全員がご出席いただいておりますので、このため「下関市立考古博物館の設置等に関する条例施行規則」第６条第３項に基づきまして、本日の協議会は成立しておりますことをご報告させていただきます。
　それでは、会議に先立ちまして、任期満了後の初めての会議でございますので、協議会の会長、副会長を互選で定める必要がございます。ご意見等はございますでしょうか。

山内　　前会長、副会長さんもご出席ですので、引き続きやっていただけたらと思います。

小林　　前任期の会長、副会長の継続ということで、ご提案をいただきましたけれどもいかがでしょうか。

（一同異議なし）

小林　　異議なしということでありがとうございます。では、本任期中につきましても、渡辺会長、河波副会長として、引き続きお願いいたしたいと思います。よろしくお願いいたします。
　それでは、新会長、並びに新副会長に、簡単にご挨拶をいただければと思います。まず、渡辺会長、よろしくお願いいたします。

渡辺　　渡辺でございます。博物館の皆様には、昨今のコロナ禍の中で様々な制約があるにもかかわらず、大変ご苦労されて博物館の運営に当たられていると思います。私個人はまだ微力ではございますが、委員の先生方のご協力をいただきながら少しでも博物館の運営に資することができるように頑張りたいと思っております。引き続きよろしくお願いいたします。

小林　　ありがとうございました。続きまして、河波副会長、よろしくお願いいたします。

河波　　河波茅子と申します。よろしくお願いいたします。ここの委員にしていただいて、もう開館当時からですから 23 年になるんだと思いますけど、今日もとっても天気のいいなか、素敵な環境で当時の文化財が生き生きと息づいているような気がしました。こちらで微力ながらも何かお手伝いできることを大変うれしく考えております。どうぞ皆様よろしくお願いいたします。

私は田中絹代文化館というところに関わっておりまして、田中絹代さんについては 30 年以上やっておりますけれども、今のコロナ禍におかれましては、大変ご苦労なさっていると思います。文化館も同様ですが、どうぞ負けずに頑張ってこれを乗り越えていただきたいと願っております。よろしくお願いいたします。

小林　　ありがとうございました。それでは、以降の協議会の運営につきましては、「下関市立考古博物館の設置等に関する条例施行規則」第６条第２項に基づきまして、渡辺会長に議長をお願いいたします。

渡辺　　それでは式次第といいましょうか、協議会資料を１枚めくっていただいたところに、資料目次というのがございます。それに従って議事を進めたいと思います。

まず、報告事項の１、「令和３年度新型コロナウイルス感染症に係る対応について」、事務局からご説明ください。

濱崎　　では事務局からご報告をさせていただきます。報告内容は多岐にわたりますので着座のまま、ご無礼させていただきます。

令和２年度の協議会につきましては、紙上開催という今までに前例のない変則的な対応をとらせていただきました。年度末のことになりまして、かなりボリュームがある資料をお送りいたしましたけれども、その内容についてはあくまでも紙上ということになりましたので、今回の協議会に合わせて、改めて参考資料の 1、２として添付させていただいております。これが昨年度までの状況ということで、お含みおきをいただければと思います。

報告事項の１といたしまして、まず、現在最大の課題となっております新型コロナウイルス感染症に対しての当館においての対応状況についてご報告を申し上げたいと思います。資料につきましては１ページからとなります。

第１に、新型コロナウイルス感染症に係る動向についてでございます。令和２年度に引き続きまして、全国的に新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、過去に例のない規模で館運営に多大な影響を受けております。このことから適宜対応と対策を実施しているものでございます。具体的な影響等につきましては、臨時休館それから県外来訪者の自粛要請等を行って参りました。資料下段に、新型コロナウイルス感染症対策としての館対応といたしまして、今年度の対応を一覧表として整理をさせていただいておりますのでこちらの方をご参照いただければと思います。臨時休館等の措置がとられた際の休館中の活動についてですけれども、基本的に再開館に備えた準備作業、その後の企画展示、講座等の準備を着実に行うということをまずは最優先をいたしました。さらに通常開館時に着手できていなかった博物館業務について、特に情報整理作業ということになりますけども、こちらを休館中に実施をさせていただいているところでございます。館蔵資料のうち、特にその物量が膨大かつ情報量が多く整備が途上でありました図書、図面類、その他の各種データ等についての整理作業を行ったところでございます。休館中の職員の勤務状況につきましては、基本的に通常の勤務を維持しておりました。しかし、下関市役

所における全庁的なリモートワークの施行推進の方針に基づき、一部の職員につきましては在宅勤務を施行いたしました。業務連絡等につきましては、Ｗｅｂ会議サービスＺｏｏｍ等を活用しながら適宜実施したところでございます。モノを相手にする作業につきましては、自宅に持ち帰ってということは物理的に不可能ですけれども、すでに情報化されているものを整理する、それから今後の活動につなげていくということについては、ある部分では、在宅勤務は他のノイズが入らないため、比較的集中ができるというような担当のコメントも出ているところです。今後の世の中の仕組みとしては、博物館業務の一部についてもリモートワークを検討する意味があると考えているところでございます。

次に、資料をめくっていただきまして2番目。新型コロナウイルス感染症への基本的な対応でございます。参考資料の3、4、5につきましては、令和2年度の段階で、文化財保護課及び考古博物館関係業務につきましての新型コロナウイルス感染症に対しての基本的な対策としてルール化したものでございます。令和3年度におきましても、昨年度までに整理をいたしましたこの基本的な対策に基づきながら、適切な対応に心がけたところでございます。まず職員の対応といたしましては、毎朝礼時に検温を実施し、マスク着用の徹底、定期的な館内消毒の実施、それから応急時の対応マニュアルを作成し適宜対応していくということでございます。2 番目に来館者に対しての対応でございますが、マスク着用についてのお願い、入館時の手先指先消毒の実施のお願い、入館履歴カード記入のお願い、それから修学旅行団体等については、来館時に密な状況が生じないように、一時的な入館規制を行いました。このうち、入館履歴カードにつきましては、個人情報保護の観点から、記載いただいたカードにつきましては施錠管理を行いまして、2 週間後に完全廃棄をするという形で徹底をさせていただいているものでございます。3 番目といたしまして、コロナ禍における環境整備のための資材の配置、それから委託業務発注でございます。物品購入といたしましては、体温検知機能つきの顔認証カメラ、これにつきましては今年度中に配置の予定としております。それから、その他消毒関連の消耗資材についても適宜購入配置をさせていただいております。委託業務といたしまして、受付、講堂、郷土学習室、それから整備を予定しておりますさわる展示等への抗菌・抗ウイルスコーティング作業を委託で実施をすることとしております。顔認証カメラ及び抗菌ウイルス等の委託業務につきましては、国の新型コロナウイルス感染症対策地方創生臨時交付金を充当いたしまして、今年度末までに配置ができる見込みとなっております。

次に、3 番目といたしまして、新型コロナウイルス感染症による博物館活動に対しての影響でございます。概要といたしましては、1 番、調査研究業務、各種博物館活動を実施していくうえで、関連する研究会、研修会等のへ参加というものがございますけれども、昨今の開催状況は、オンライン開催ないしは対面式とオンラインを組み合わせたハイブリッド化が非常に進んで参りました。このような状況を可能な限り有利に受けとめまして、積極的なオンライン参加を実施をしているところでございます。緊急事態宣言等により、全国的な移動規制もあり、越境県外出張については一時的な規制がかかりました。この点については、報告事項２において説明させていただきたいと思います。次に、2 番目の展示業務ですが、臨時休館のが発生により、企画展の会期短縮、中止等の措置がとられるものが出て参りました。3 番目の博学連携については、市内中学校や高等学校の職場体験を例年受け入れをしておりましたが、学校側の判断として中止措置がとられました。また、地域連携については、川中まちづくり協議会とともに平成 31 年度の綾羅木郷遺跡史跡指定 50 周年の記念に絡めて着手した、「川まち弥生まつり」について、残念ながらでは令和2年度に続き、2年連続での中止ということになってしまいました。

報告につきましては以上でございます。

渡辺　　ありがとうございました。ただいまの説明についてご質問、ご意見があればお願いいたします。

田中　今回のコロナウイルス感染症の影響が各領域に及んでいるわけですが、国の交付金の活用ですけれども、体温検知機能を持った機器の導入というお話がございました。例えば、Ｚｏｏｍを入れたりとか、様々な形でオンラインを使う対応が図られていくわけですが、そういったところにも交付金を使うことができるのですか、またそのような設備が導入されているのでしょうか。

濱崎　コロナ関連の臨時交付金の活用対象範囲には、アフターコロナに対応した世の中の仕組みづくりというものも、項目としてあり、今後充当する可能性はあろうかと思います。ただ、当館の個別事業として国に対して直接要望して措置をされるというのもではなく、地方創生交付金として下関市に対して一括交付となります。このため、各部局から交付金の活用内容について要望し、市全体の施策の中で検討する形になっています。段階的な要望聴取がなされ、結果として、当館要望の中で今年度末までに措置されたものとして、抗菌処理とサーモカメラの設置があります。これからも、臨時交付金の運用が継続されるとすれば、アフターコロナに向けた博物館に必要なリモート系やＩＴ関連資材の措置を期待はしておりますけども、優先順位の問題としても措置されるかどうかはこれからのことだと思います。ただ、ＯＡ化につきましては、現在の実態として、職員一人一人にパソコンが配置されており、インターネット環境の整った、ある程度インフラが整備されている状況でありますので、特出しでこれが遅れているので何か措置をしていかなければならないという状況ではないと思っています。ただ、学校との連携では、一定の期間、生徒・児童のみなさんが博物館においでいただけないので、博物館と学校現場をどう結びつけるかというような仕組みづくりについて、学校の担当者と連携を図りながら、検討していかないといけないと考えています。そのなかで国の臨時交付金の対象として、もし採択いただけるものであれば積極的に手を挙げていきたいと考えているところでございます。

田中　私もそのことが気になっていて、最後におっしゃっていただきましたように、この機会に学校教育との連携を図るいい機会ではないかと思うのですね。ぜひ手を挙げていただいて、そういった部分を充実していただけるよう、よろしくお願いいたします。

渡辺　他にいかがでしょうか。大変な制約の中で、いろんな工夫をされていることが非常によくわかります。
山内先生が館長をなさっている博物館をもとに考えて、何かこういう工夫もあるのだというようなことがあればご発言をお願いします。

山内　私もまだ館長になって２年という短い期間ですので、そんなに多くはやっていないのですが、やはり博物館は、小学生、中学生にたくさん来てもらって将来のことに備えるというのが一番大切と思っています。私どもの博物館では、期間を限らないで、勾玉づくりや土笛づくりなどの行事を常に実施して、博物館になれ親しんでいただくというふうなことをやっています。講義とか講演などについては、人数は半分にして、間隔をとり、寒いながらも常に窓を開けてやっている状況です。必ずしもうまくいっているわけではないため、あまり参考にはならないかもしれません。

渡辺　ありがとうございました。他にいかがでしょうか。

河波　今の関連ですけど、当館では、毎年、アニメ体験教室というのをやっております。今年は中学校をお

借りして、東京のアニメーターとリモートで教室を開きました。現在の教室には、それぞれ立派なモニターがあり、子供たち一人一人にはタブレットがありますので、環境としてはリモートでこちらから情報発信するのにとても環境が整っているのではないかと思って、感心した次第です。子供たちの方が我々よりもちょっとリモートに慣れているところもありますので、是非ともそのようなことも実行していただければと思います。

渡辺　ありがとうございました。他にいかがでしょうか。

藤丸　渡辺会長のお話を聞いて思い出したんですが、昨年 11 月に、例年開催されている、九州考古学会が開かれました。コロナ禍でＺｏｏｍのリモートの会だったのが、テーマが新型コロナ禍における博物館の業務などでした。それも日本と韓国を結び、韓国扶余の国立博物館の女性の学芸員が博物館でどういうことをコロナ禍でやってきたかを発表されました。博物館のホームページにアニメでいろいろなソフトを活用して、学校や子ども向けにアクセスできるような簡単なものをいくつもつくっているとのことでした。反響として、子供たちからのアクセスが非常に多いということをその学芸員が話したことを覚えています。同様のことが、下関市立考古博物館でもできるのではないでしょうか。今、河波副会長からお話がありましたように、そういうプロダクション等アニメなどをいろいろやるようなところがあれば、一度ご検討いただければと思います。こういう時期なので、リモートを使って、子どもたちがどんどんアクセスするような、アニメを使った楽しい博物館の紹介というのを扶余の学芸員がやっていました。以上です。

渡辺　ありがとうございました。九州考古学の大会の結果というか雑誌がもう出ているのでしょうか。

藤丸　いえ、Ｚｏｏｍ開催でしたので、記録としてはどういう形で残っているかわかりません。その扶余博物館の学芸員は、口頭でこのようなアニメを使っていると説明されたのみで、具体的な映像紹介はありませんでした。ただ、説明内容から、河波副会長が言われたようなことではないかと想定したことを覚えています。

渡辺　ありがとうございます。またそういう資料がもしありましたら参考にしていただければと思います。この博物館でも様々なリモートでの工夫というのがあるようですので、次の報告事項の２、「令和３年度事業について」、事務局からご説明いただきます。

濱崎　報告事項２、令和３年度事業についてご説明申し上げます。

基本的な方針につきましては、昨今、地方自治体は、明確な目的意識を持った努力目標を設定し、成果を検証するという作業が一般的に行われております。博物館業務についても同様で、ある意味での成果主義が導入され、モチベーションにもなっています。本市の制度では、年度当初に組織目標を設定し、併せてその業務に関わる担当職員も個人目標を設定いたします。年度末にその状況について客観的な評価を行うこととなります。本館の目標につきましては、開館以来四半世紀を経過し、施設老朽化の問題は当然顕在化をしております。予算措置の状況から、長年の課題である大規模な展示リニューアル等については計画的に実施をしていくということはそうそう容易なことではありません。また、職員配置についても、余裕がなく、マンパワー不足も深刻な課題となっています。このような状況の中で、当館が

地域社会における博物館施設として、現在及び将来における存在意義を示し、求め、期待される社会教育施設としての役割を果たすべく、戦略的な取り組みを推進する必要があると考えているところです。

このことから、令和３年度の組織目標としては、以下の重点目標・個別項目を設定し、計画的に事業推進をしているものです。重点目標としては、博物館活動の充実と施設の長寿命化を位置付けています。個別の項目としては、第１に、ユニバーサルミュージアムの推進。これは一般的に博物館資料を見る、それから担当学芸員からその内容に関してのレクチャーを受けるという、見る・聞くという基本的な機能のみならず、その他の五感に訴える体験型の施設としての機能を充実させることを目標とするものです。２番目として、総合的危機管理の検討・対応です。これはもちろん新型コロナウイルス感染症対策、それから施設老朽化に伴う施設の長寿命化計画が含まれています。３番目として、各種の連携を図りながら、独自性を深化させていこうとするもので、博学・博福および地域連携としての博地等の深化を本年度の目標として掲げています。

管理運営業務については、まず長寿命化計画の策定です。長寿命化計画については、平成 25 年に国のインフラ長寿命化基本計画が出されており、地方自治体は各施設についての個別施設計画、長寿命化計画を策定するというよう求めています。本市におきましては、これを受けまして、平成 27 年に下関市の公共施設マネジメント方針がまとめられ、続く平成 28 年には公共施設総合管理計画、平成 30 年には公共施設適正配置に関する方向性が示されています。これに基づきまして、考古博物館の施設の状況、それから今後の長期的な傾向について、計画策定を進めているところです。これまで関係部局と調整を進めながら、計画の具体的な肉付けを行っておりまして、年度末までに計画策定する見込みです。

２番目の設備の更新・整備です。考古博物館の休憩所「弥生の里」ですが、空調機器がかなり古くなっており、更新するタイミングになっておりました。今年度、新型コロナウイルス感染症の地方創生臨時交付金を充当し、今年度末までに更新することになりました。この「弥生の里」については、元々休憩所として設置されておりまして、一般の飲食事業者に入店いただき、食事等を提供する休憩施設として長らく機能しておりましたけども、採算性の問題もあり、手を挙げていただく事業者がない状態が、長期間にわたってございました。平成 28 年以降は、市内で活動しておられる子育ち支援団体に入居いただき、未就学の子供さん、それからお母さん方においでいただき、施設を活用していただく形になっています。今年度、元々の厨房部分が居室として整備され、臨時交付金を充当しての空調整備も行われますので、より利用が促進されることとなります。この施設については、年間約１万人の利用者がおり、考古博物館のサテライト施設としての活用を深めて参りたいと考えているところです。

２番目に、クラウド型収蔵管理システムです。席上に資料を配布させていただいておりますけれども、収蔵品と展示解説を一体化して管理をするためのソフトウェアです。これは全国のその他博物館が共用する基幹ソフトを利用することにより、考古博物館のみならず、その他の博物館を利用しておられる方々に下関市立考古博物館の存在も気づいていただき、博物館相互の相乗効果が高まるメリットがあります。また、独自の収蔵品管理が上手く機能するということを期待しての導入です。それから３番目に、館内抗菌・抗ウイルスコーティングです。先ほどご説明しましたように、受付、講堂、郷土学習室、さわれる展示等についての抗菌処理を実施いたします。それから、常設展示のスポットライトの照明のＬＥＤ化です。順次蛍光灯の生産終了が決定しており、博物館施設についてもＬＥＤ化が進んでおりますが、ブースごとの更新を進めておりまして、今年度は古墳時代コーナーのスポット照明のＬＥＤ化を行い、これにより今年度中に常設展示のスポット照明については、完全ＬＥＤ化が終了する見込みになっています。３番目といたしまして備品購入です。先ほどご報告いたしました体温検知機能付き顔認証カメラの導入です。４番目、設備改修です。これは一般的に老朽化している不備の生じた設備についての

改修です。具体的には、インターホン、監視カメラ、浄化槽のエアー管、冷却水配管等の修繕、それから屋外の「弥生の里」のトイレの漏水等についての修繕を実施しています。

３番目といたしまして調査研究業務です。各種研修会等に、リモート開催も普遍的に実施をされるという形になりましたので、積極的に参加しているところです。具体的な報告につきましては、４ページ中段の各種研修一覧として提示をしています。こちらのほうをご参照いただければと思います。それから資料調査として、これから先の博物館の基本的な調査研究業務に資するために、情報収集のため、綾羅木郷遺跡出土の関連資料、県内その他施設で収蔵されているものについての資料調査を実施しています。３番目といたしまして、綾羅木郷遺跡ほか館蔵資料の整理です。企画展示の合間を縫って開催する平常展示等に要する資料の確認・整理をまず継続的に進めているところです。それから、席上に美術館の企画展のチラシを配布させていただいておりますけれども、綾羅木郷遺跡の蹂躙、それから指定に伴って、グループＳＹＳと言う、市内の写真撮影の活動をなさっておられる方々が大きく関わられました。その手になる写真パネルにつきましては、所蔵があまり判然としない形でご寄贈をいただいておりました。今回の美術館での企画展の中で、この団体が撮影された活動を改めて検証しようという機会が生まれました。このため、グループＳＹＳ撮影の写真資料を、考古博物館館蔵資料として整理することといたしました。

４番目といたしまして、展示業務です。平常展示という表現をしておりますけれども、常設展示の補完的展示で、令和２年度より継続的に特別企画展室を利用して実施しているところです。現在の平常展示は、平成 30 年度に「郷台地奇譚 EpisodeⅡ－綾羅木式の世界－」と題して開催をいたしました、企画展内容の再構成、ブラッシュアップしたものをパッケージ化したものです。この平常展示の実施の効果および目的は、常設展示の内容を補足し、より深く理解していただくためのパッケージ展示、それから、そのパッケージ化による学芸員の負担軽減です。それから、ある程度そのパッケージ化されたものではありますが、展示ごとに意匠・工夫を凝らすという余地が残されておりますので、経験が少ない若手職員の人材育成の素材としての活用・効果も期待しているところです。展示期間については、資料の❶～❹に示しているとおりです。２番目として、さわれる展示コーナーの新設です。令和２年度にコンテンツを整備をいたしましたハンズオンツールについて、誰もが利用できる展示ブースとするため、解説パネル・点字シール等を作製しました。昨年度作製したハンズオンツールは、「綾羅木式土器の模造品」、「土器文様プレート」、「立体土器パズル」等で、後程お時間がありましたら実物を見ていただきたいと思いますが、こちらの会場の左手に作製した現物資料を配置しています。点字シールの作成にあたり、市民ボランティア団体と連携をいたしましてその支援を受けているところです。供用開始に向け、新型コロナウイルス感染症の対策として、どうしても触れるということが一番大きな課題となっておりますので、抗菌・抗ウイルスコーティングを実施することにより、安心・安全に活用していただくという環境を作ろうと考えているものです。このような抗菌処理が行われたうえで、常設展示の一部として、一般公開する予定としております。

（２）の企画展示です。山口県埋蔵文化財センターの展示パッケージによる巡回展、「発掘された山口」です。チラシを席上に配付させていただいております。概要は、昨年度、県内各所で県埋文センターが発掘調査した、その調査成果の県内巡回速報展で、本館が誘致し、開催するものです。出展資料数約 350 点です。５月 15 日から６月 20 日までの会期として開催を予定しましたが、５月 21 日以降、会期

終了まで、本市の新型コロナウイルス感染症対策に伴い臨時休館となりました。実質の展示期間が短いということもあり、来館者数 94 人となりました。新型コロナウイルス感染第４波によって会期が激減したことが、非常に悔やまれるところです。県内の発掘調査の最新情報を、下関市民が身近に受け取ることができる企画ですので、今後も連携した取り組みを継続していきたいと考えているところです。

次に、②の発掘速報展「掘ったほ！下関 2021」です。こちらもチラシを席上配布させていただいております。これは本市オリジナルのもので、下関市教育委員会が実施しした令和２年度の発掘調査を中心に、その成果を紹介するものです。併せて、考古博物館の調査研究業務として、権現山経塚出土品の３ＤＣＧを実物資料とともに展示を公開て、新たな研究手法とその有効性、活用の可能性等を紹介したものです。この事業については、国庫補助事業「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」を活用し、実施しているものです。主な展示資料は、市内遺跡出土品、約 220 点です。会期は７月 31 日から９月 26 日を予定しましたが、これも８月 26 日以降、コロナウイルス感染症に伴う臨時休館の措置がとられたことにより、会期は極めて短くなりました。夏休み期間中ということもあり、学童を含めた来館者があり、1,320 名の方にご観覧いただきましたが、想定ほどの情報発信には繋がりませんでした。展示解説等については、３密対策として毎週金曜日、午前午後の２回、定員５名とし、さらに予約制として実施しました。さらに、会期短縮を余儀なくされたことから、この展示解説会についても十分に来館いただくことができませんでしたので、展示解説動画を撮影し、公式 YouTube を活用した情報発信を今現在進めているところです。

成果と課題としては、例年の発掘調査成果とともに、昨年度の経塚企画展で出展した権現山経塚資料について、デジタルカメラの撮影データを３次元データ化し、さらにＣＧを作成するというプロセスを解説展示し、新たな研究手法の導入状況について紹介しましたが、その作成データをさらに活用し、実際にさわれるハンズオンツールを製作することを一連の計画としており、データの将来的な活用の幅が広がっているということを認知していただく機会としても期待しましたが、休館措置が悔やまれます。また、展示解説等の動画コンテンツについては、博物館活動のアーカイブ化と、企画事前のＰＲコンテンツの両面の機能が期待されますが、その手法・内容については、さらなる検討を進めていく必要を感じています。また、展示解説会については、予約制、5 名限定と制限しましたが、利用者の警戒感が非常に強く、定員割れが生じました。ウイズコロナにおける博物館の対面方式による各種の取り組みは、状況が深刻になればそれだけ大きな課題が生じることから、手法についてさらに検討が必要だと考えています。

③の企画展「遺跡 de あーとー表現しよう古代のしものせきー」については、チラシを席上に配付させていただいています。「アートの視点なら、もっと市民が考古学に親しめないか？」という企画意図をもって、これまで 20 回にわたり実施をして参りました「やよい絵画展」のブラッシュアップ企画として今年度よりスタートしたものです。下関の弥生・古墳時代に即した作品を広く公募し、作品に対して来館者による投票を行うことによって、優秀作品を決定、表彰、公開という形をとろうとするものです。こちらも国庫補助事業、地域の特色ある埋蔵文化財活用事業として実施するものです。今年度は、121 点の応募をいただきました。これまで絵画のみを対象としておりましたが、今年度からは、平面部門、立体造形部門の２部門を設置し、それぞれに一般の市民の方からのご応募をいただいたところです。投票結果を整理し、各部門ごとにに、最優秀作品、優秀作品等の選定を行い、表彰させていただいております。副賞については、当館職員が製作いたしましたオリジナル副賞、和同開珎・内行花文鏡レプリカ、勾玉・管玉セット、体験学習優待券等を用意しました。コストをかけずに、差別化を図り、応募のモチベーションに少しでも繋がるような副賞を考えた結果、こうしたものです。その成果と課題として、

作品応募については、１校１学年の学校単位の応募があり、応募全体の大半を占める結果となりました。より広く多くの方々から応募いただくための動機付け、それからアナウンスが今後の課題と認識しています。できれば市内の恒例企画として、毎年この時期になると市民の方々が準備をなさった作品を応募していただけるような主要な企画に育てていってくれればという思いを持っています。

次に④の発掘速報展「掘ったほ！下関 2021 改」です。これは当初計画の速報展が、会期半ばで終了しましたので、情報をもう少しきちんと受けとめていただくため、再開催したものです。これにより、当初計画しておりました中世墓関連の企画展については延期といたしました。また、同じ内容で開催するのではなく、本年度の国庫補助事業として考古遺物の３Ｄ造形作業を進めて参りましたので、その成果物をこの企画展の中で新たなブースを用意し、公開することといたしました。ユニバーサル・ミュージアムの理念の下、実際に触っていただく環境を作る取り組みを試行したところです。「さわれる考古資料」については、３Ｄプリントし考古資料４点などを公開いたしました。この発掘速報展は現在、開催中であり、協議会終了後にご観覧いただければと思います。

教育普及業務につきましては、一覧表にありますように、今年度から有料化を図りました。参加費 300 円となっております。下関市の文化財関係担当職員による講座を開催。第５回につきましては、福井県立大学の今井先生に恐竜化石についてのご講演をいただくという形をとりましたけれども、これもコロナ関連の影響で実際においでいただくことができなくなりましたので、初のリモート開催です。外部講師を遠方からご出席いただき、市民の方は博物館にて受講するという形をとっています。体験学習については、席上にお配りしているチラシのとおりです。自主事業につきましては、９ページに一覧表で提示してございまして、開催回数 20 回、参加者合計については 303 名となっております。会場キャパを通常よりも２分の１程度としておりますので、1 回の参加者が非常に少なくなっております。このあたりが入館者の減に繋がる要素となっています。ホームページコンテンツとして、「ぶえ吉広場」も新たなコンテンツの準備をしております。一部参考に資料配付をさせていただいておりますが、北海道博物館が発起いたしました、「おうちミュージアム」の取り組みに、本館としても参画いたしました。休館期間中であっても博物館を身近に感じていただき、活動を理解していただくような取り組みを実践しています。それから、来館時に自主的に学習ができるよう、ワークシートの作成も行っております。

ボランティア活動としては、一覧表のとおり、各種の活動を支援いただいています。今年度の登録ボランティアスタッフ数は 10 名となっています。

次に、（５）の博学連携です。学校連携については、生徒・児童以前に、まず、指導いただく先生方との関係を作ることが重要だと認識してます。このこともあり、教育委員会主催のわくわく教師塾で講演をさせていただきました。あと例年のことでありますけれども、博物館実習生の受け入れを行っています。（６）の博福連携としては、先ほどの説明にもありました子ども・子育てネット「こどもはらっぱ」との有機的な関係を深めるということを継続的に進めております。実績としては一覧表のとおりです。その他関係部局との関連としては、下関市こども未来部子育て政策課との「子どもの居場所連携交流会」への協力としてこの博物館を利用していただく形をとっています。それから、パラリンピック開催に伴い、聖火フェスティバルが全国的に実施されました。本市におきましても「下関の火」採火イベントが、考古博物館を舞台に実施されました。残念ながらコロナ禍であまり多くの人が参加することができず、規模を縮小して実施しました。採火にあたっては、特色を出すという意味で、本市出土の多紐細文鏡は凹面鏡であり採火器である可能性も指摘されていねことから、凹面鏡を利用した採火を企画しました。

（７）の特別観覧・資料利用については、資料のとおりです。

それから、６のユニバーサルミュージアムの取り組みです。令和２年度に下関南総合支援学校、市民ボランティア団体との連携を図りながら制を進めてまいりましたハンズオンツールを活用するための次なる展開を推進しました。また、考古学における触察、触れるということをテーマとした授業や研修を企画し、同様に学校関係者に対しての講義を当館学芸員が行っています。また、点字ボランティアとの連携により、館内の文字情報等についての点字翻訳を進めております。併せて、その点字の講習も当館職員が受講しており、自らも点字に対しての理解を深めることも実施しています。

それから、触察可能な下関市内遺跡出土の模造品の製作を適宜進めています。これは、国庫補助事業として継続的に実施したいと考えているもので、成果物がさわる展示コーナーに結びつく流れを想定しています。

７の入館者動向といたしまして、コロナの影響により入館者は激減をしている状況です。コロナ以前は、冒頭に教育長からご挨拶させていただきましたように、年間２万 2,000 人から２万 5,000 人の水準で推移をしておりましたけれども、元年度１万 7,516 人、昨年度については 7,381 人、今年度につきましては少し増加傾向にありますけれども、1 月末現在で 7,699 人と、非常に入館者が減っている状況です。学校受け入れについては、安全に配慮したうえで、可能な限り継続したいと考えており、学校団体や多くの小学生の修学旅行に来ていただいている状況です。

刊行物については、平成 30 年度から紙媒体での印刷は休止し、Web 版に移行しています。今年度版については年度末に公開の予定です。広報活動・情報発信については、公式ホームページ、市の紙媒体、タウン誌、テレビ、ＣＭ等の活用を積極的に図っているところです。それから公式マスコット「ぶえ吉」等のやわらかめの情報として、フェイスブックによる情報発信を積極的に推進しているところです。

それから４月１日付けで、公式ホームページをリニューアルいたしました。なるべく訴求力のある情報を発信していくよう、努めているところです。ＳＮＳについては、公式フェイスブック等を活用し、フォロワー数を獲得できるような魅力的な情報発信をこれから戦略的に進めていこうと考えているところで。それから、公式のユーチューブについては、展示解説を含めて、外部の方が考古博物館の具体的な内容を見知っていただくためのコンテンツを作成し、逐次情報発信しているところです。

また、その他の周知として、雑誌、学会誌等への積極的な投稿による施設、資料紹介をさせていただくということで、「博物館研究」、「季刊考古学」等について投稿をさせていただいているところです。

渡辺　　ありがとうございました。ただいまの説明についてご質問、ご意見があればお願いいたします。

木原　　今、説明してくださったなかにありましたけれども、今年の１月 29 日に「恐竜が生まれ暮らした下関」というオンライン講座がありました。私も参加させていただいて本当に楽しかったんですよね。恐竜発掘の歴史の始めからずっと説明があって、それは丁寧なオンラインの授業でした。中学生や小学校の高学年の子供たちが聞いたらさぞかしワクワクするだろうと思いましたし、下関で恐竜の卵が見つかったことも、こういうふうな石で、こういうところで見つかったんだよと具体的で、まるでオンラインだからこそ余計わかるのかなというくらい丁寧だったので、何とか小学校高学年とか中学生の子供たちに見てもらいたいなと思いました。嬉しかったのは、若いお母さんが幼児を連れておられました。子どもたちはみんな小さい時から恐竜のことには興味があるんだなと思って、とっても楽しい企画だったなと思いました。

渡辺　　ほかにいかがでしょうか。

近藤　　マスコミ取材がありますけれども、発表する新聞が偏ってますよね。ほとんどが毎日新聞だけです。一般的には朝日・毎日・読売と山口ぐらいは来てもらえるように、新聞記者の担当部署によく言ってＰＲしてもらった方がいいんじゃないかなと思います。私が広報活動していた時代に、新聞記者って何かいい話はないか、記事はないかと常に聞かれるんですよ。そこで、ここが今こうやってるよって言ったら行ってくれることが結構多いので、そういう市役所の内部の担当の課の課長とか新聞記者と接する人によくＰＲをしたらいいんじゃないかと思います。以上です。

渡辺　　ありがとうございました。近藤先生のご意見に事務局は何かございますか。

濱崎　　マスコミに対しては、企画等に際して事前に記者クラブへの投げ込みをやっています。これは各社公平にという形なのですが、取り上げ方は各社偏りがあります。やはり記者の個性が大きく作用しているように感じています。ご指摘の市役所内部の促してくれる方との関係性については、まだまだ十分に機能してないところがありますので、活用を検討したいと思います。ご意見ありがとうございました。

渡辺　　ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

田中　　毎年この事業に関するご報告をいただいているわけですが、私も前職でそういう経験があったのですが、これだけ多彩な事業を展開されておられて、危ぶむことなのですけれども、職員の皆さんはオーバーワークになってないのでしょうか。会計年度職員の方が３名おられるということもありますし、身分的な部分でも不安定な状態の中で、よくやっておられると思います。役職だけではなくて業務評価というものがどこにも入ってきており、参加人数の数字などが、大きなプレッシャーになっているかもしれませんが、これだけの内容をこの人数・予算で、よくやっておられると、大変じゃないかなと思ったりします。

考古博物館の最終的な力は人になるわけです、多くの業務を展開されておられることはよくわかるのですが、同時にもっと職員の皆さんの研修とか資質の向上に力を入れるというのも一つではないかと思ったりします。今までの業務の流れの中で定着してきているということで、業務内容がそのまま継続しているのだろうとは思いますけれど、外部的にみるとこれは本当にオーバーワークでまかなわれているような気がして仕方がないのです。これだけのことをやっていただいているというのはありがたいことだと思うのですけれど、そういう部分を危惧しております。

渡辺　　ありがとうございました。私も全く同感で危惧をしておりましたが、事務局の方からご意見ございますか。

濱崎　　オーバーワークであるということはそのとおりでございます。事業の編成自体は、やはり予算主義というのがありますので、予算書の項目ごとにどういうふうに年度の計画を組み立てていくのかという視点はどうしても避けられないことだと思います。ただ現状では、基本的な方針をいくつか定めまして、その中で何を取捨選択していくのかという問題意識をもっています。言い方としてはあまりよくありませんけども、現状においての組織の身の丈に合ったものはどの程度のものかということを冷静に考えることも必要で、ちょっと上を向いていくというようなモチベーションのバランスというのが必要になっ

てくるのではなかろうかと思います。これだけの業務量を現状のスタッフにおいてこなしていっていることについては、非常に大きな根本的な課題だと認識をしておりますが、では何を絞り、何を選択していくのかということについては、なかなか簡単に答えが導きだせるものではないなというところです。

おっしゃることは非常によくわかっておりまして、この議論のなかで、ウェイトのかけ方を含め、客観的に見ていただいたうえでのご意見等があれば私どもとしてはありがたいと思っております。

渡辺　田中先生の今のご意見、十分にご留意いただきたいと思います。他にいかがでしょうか。

田中　これが下関の考古博物館の方針だというものを、自信を持ってやっていかれることが一番だと思います。外部的な評価というものは、必ずついてくるとは思います。ぜひ自信を持って進めていただくこと、それが望ましいと思います。それこそがこの博物館のポリシーであって、その選択と集中がいい方向に進んでいくと思います。ぜひよろしくお願いいたします。

渡辺　ありがとうございました。博学連携について冨士本委員と小戸委員にお伺いしたいのですが、来年度も博学連携の様々な事業がございまして、これから説明があると思うんですが、何か３年度の博学連携の内容について、もう少しこういうものだったらいいとか何かご要望とか、そういうことはございますでしょうか。あるいは、この平成３年度事業の内容についてご意見があればお願いしたいのですが、まず冨士本先生お願いします。

冨士本　夏休みにポスターを子供たちが作るというふうなことがありました。とてもいいなとは思ったのですけど、ポスターを作ることを通して、こういった博物館に行ってみようかなとか、博物館にどういうものがあるのかなとか、また学校等をつないでというふうな、いろんな展開が考えられたと思うのです。ただ、意外と子供たちは知らないことが多い。博物館がどういうところなのかとか、こういった点まで書いてねと言われてもそのテーマ自身を調べていく力がまだ子供たちにないなかで、ポスターを書く前に学校と連携して、例えば先ほどオンラインのお話がありましたけれど、オンラインでつないでここにこんなものがあるよとか、ポスターもこんなものがあって、こんなことを博物館に来て勉強したものをポスターにしてごらんというような、そういうオンラインがあると、また子供たちってすごく意欲が高まって、また調べていこうかなというふうな意欲が高まるのではないかと感じました。以上です。

渡辺　ありがとうございます。小戸先生いかがでしょうか。

小戸　今、丁寧にご説明をいただいたのですが、正直なところこれほどたくさんの企画なり講座なりを開いているということを、恥ずかしいんですけども、私自身が知りませんでした。

実は中学校社会科の研修会の時に、今年度の夏に当館の職員の方に来ていただき、教職員向けにＰＲしていただきました。その際、やっぱり教員にまずはそういうことをきちっと知らしめたうえで、そのうえで子供たちと、というふうにしていただけないかというお話はさせていただきました。

先ほど委員さんの方からもありましたけれども、中学校はもう各教室に電子黒板等を設置しておりますので、なかなか今この事情の中で来館が難しいので、やはり学校としてはオンライン等でつないでいただいて講座等を開いていただくというのが、この間の利用としては一番現実的ではないかと思います。また今後、コロナの状況が落ち着いてきた場合には、社会見学等で利用させていただくようになると思

うのですけれど、何か人数制限があるということであれば、オンラインが現実的かなというふうに思っています。以上です。

渡辺　ありがとうございました。博物館と学校の先生方との、もう少し情報共有といいましょうか、そういうものが必要ではないかというふうに私が今受け取ったわけです。

私は今、岩国市で新しい博物館を建設する計画がありまして、その計画策定に関わっているのですが、その会議の席で学校の代表の方が、例えば子供たちを連れてきてワークシートなどを与えてということをやっているんですが、そのワークシートづくりに最初から教員もかかわらせてくれというご意見がありました。つまり、博物館に来て博物館が準備しているものをいただいて生徒たちを見学させるということではなく、ワークシートづくりから教員も関わって一緒に何かやっていくというようなことが必要じゃないかというご意見だったのです。そういうことについてはいかがでしょうか。具体的にどうやっていくかというのは難しいと思うのですけど、何かもう少し教員が関わっていく必要があるかどうか。そのあたりはどうお考えでしょうか。

冨士本　いろんな場合が考えられると思うのですけれども、ものすごく思い入れを持ってその学習に取り組んで博物館に行くぞっていう教員であればあるほど、ひょっとしたら博物館が用意されているワークシートっていうのは物足りないかもしれない。逆にそうではなくて、そこまでの思いがないのだけど博物館に行って何だか子供たちをワクワクさせたいという思いがある教員であるならば、博物館で用意されているワークシートっていうのはとても楽しいものになっていると思います。だから、そこの教員の思い入れの違いと、あと実際に教員がそのワークシートづくりに関与するっていうことになったらなったで、またどこでそういう時間を生み出すかというようなことなど、いろいろな問題がまた考えられると思います。でも面白い試みだなと私は思います。

小戸　確かに既製のものをいただいているだけでは、教員側方の思い入れが入らないのではないかなとは思います。やはり専門性を持っておられる方のご意見に自分たちの意見を反映していただくというのは、またここを利用するきっかけにもなると思いますので大変いいことだと思います。ただそこまでの一番の問題は、なかなか教員の方も普段忙しい毎日を送っておる教員が多いものですから、時間を取るとしたら長期の休みとかというようなことになると思いますので、その辺で企画していただくようになれば参加する教員も出てくるのではないかなと思います。

渡辺　ありがとうございます。私が知る限りでは埼玉県の川越市立博物館と、岐阜県の美濃加茂市のみのかも文化の森美濃加茂市民ミュージアムが、研究会と言う名称なんですけど、年に1回連絡協議会みたいなものを作って、教員の方の代表と博物館の学芸員とそれから教育委員会の担当の方と参加して、そのネットのワークシートづくりだとか、あるいは教材づくりだとかをやっているということを伺っています。大変やっぱりお互いに忙しいので難しいかと思うのですが、何かそういうやり方もあるかなという気がいたしました。

藤丸　北九州市のいのちのたび博物館の開館と同時にミュージアムティーチャーを博物館の中に人事異動できていただいて、学芸員といろいろディスカッションしながらワークシートを作っていった。それは政令指定都市だからできるのですね。学校の先生方の人事異動権は県が持っています。政令指定都市の場

合には市が持っているのですよ。わりと北九州市の場合はそれがやりやすかった。今でもまだミュージアムティーチャーの人がおられますけれども、それは小学校、中学校それから幼稚園、そういう要するに学校の教員が博物館の中に異動で来ていただいて初めて、今言われたような博学連携がものすごくできる。いのちのたび博物館は成功した例なのですけれども、学校の先生方や教育委員会のシステムが問題ですね。政令市・県や、県立の博物館だったらわりといけると思うのですが、ところが市の博物館だとハードルがあってなかなかそれがうまくいかない。かといって私の経験からすると、学校の先生方は日常ものすごく業務過多で過ごされていますから、月に1回と話しても、もうそれで終わってしまい、継続しないのですね。学校に持ち帰ってやろうというような時間的な余裕がない。だから一つの案ですけれども、定年で退職された社会科の先生に嘱託で博物館にきていただいて、1 年間学芸員とディスカッションしてそういうシートを作ってもらう。そうやって博物館の展示について学芸員とずっと1年間ぐらい継続しながらディスカッションする、そういう余裕がないとなかなかできないと私は思っています。

渡辺　ありがとうございました。ミュージアムティーチャーについてのご意見でしたが、山口県立博物館はそれが可能なので、今２名ほどおられると思います。下関市もかつては充て指導主事という形で教員が博物館に配置されていた時期もあったようですが、それはちょっと難しそうなので、今、藤丸先生がおっしゃったようなことが仮にできれば、より一歩連携を進めることができるかなという気がしました。ちょっと雑駁な話でしたが、もし事務局の方が参考になることがあればご検討いただければと思います。

それじゃちょっと時間も押して参りましたので次に報告事項の３、「平成３年度の収支の決算（見込）について」、ご説明お願いします。

沖中　それでは平成3年度の収支決算見込みについて説明させていただきます。

資料の19ページと20ページをご覧になっていただければと思います。

まず19ページの収入見込みです。雑入の体験講座等参加費ですが、これが3年度は25万4200円になっております。これは、2 年度がコロナの影響で、講座や講演会が中止になっておりますので、2 年度の収支 1 万 8000 円から大幅に増加したということになっております。それと、表の上のほうにいきまして国庫補助金ですけれども、この国庫補助金の史跡及び埋蔵文化財公開活用事業費補助金が100万円交付の見込みとなっておりまして、これは発掘速報展や企画展関連の事業及び出土品の触察用造形複製品の製作に充当されることとなっております。それと同じく国庫補助の新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金の310万円を受けることになっておりますが、これは先ほどありましたように休憩所であります弥生の里の空調整備事業や、検温カメラの購入や抗菌・抗ウイルスコーティング作業に充当される予定となっております。3については以上となっております。

それでは、20ページの最初の方をご覧になっていただければと思います。

こちらも主な項目を説明せていただきます。先ほどの歳入と重複するところもあるのですが、委託料の新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金充当事業ですが、休憩所の弥生の里の空調整備事業として250万円予算額として上がっているんですけれども、これは6月補正での計上となっております。同じく抗菌・抗ウイルスコーティング作業のおよそ 90 万円なんですけれども、こちらも委託料となっておりまして、それと備品購入費は検温カメラの購入19万8000円、つまり委託料の抗菌・抗ウイルスコーティング作業の 94 万円と、備品購入費の検温カメラの購入の 19 万 8000 円の２つは、文化財保護費からの流用となっております。今お話した3点はすべて当初予算には計上されていなかったもの

となっております。それから手数料ですけれども、こちらは触察可能な市内遺跡出土遺品の模造品を製作するということで、今事業が進行中ということになっております。

3年度の収支決算については以上です。

渡辺　次に、議案の1に移りたいと思います。「令和4年度事業計画（案）」についてご説明をお願いいたします。

濱崎　令和4年度事業計画案についてご説明申し上げます。令和4年度の事業計画については、程議案2でご説明申し上げます予算案に連動するものです。基本的な考え方のすべてはご説明しませんけれども、これまでの活動を継続、持続させるという観点で1から5までの項目を設定しています。

綾羅木郷遺跡に隣接する博物館としての、サイトミュージアムとしての活動をきちんと深めていくということ。それから、考古博物館ならではの、独自の取り組みをきちっと深めていくということ等を中心とさせていただきながら、関連の施設との連携を図りつつ、ユニバーサルミュージアムの活動をより深めていくという基本的な考え方になっています。

具体的な項目としては、まず管理の面は当然のことながら、常設展示の中のハンズオン展示につきまして、これまで2ヵ年にわたって準備を温めて参りましたものを、1日も早く公開、活用をしたいということで、今年度末までにある程度の活用のめどを立てて参りますので、次年度早期には、具体的に市民の方々に利用していただくということで進めたいと考えております。それからこの活用に当たりまして、先ほどご意見もありました、ワークシートの作成等については、関係者のご意見をいただきながら、より有効なワークシートとなるよう作成を進めたいと思います。それから新たな機器類の導入についても、展示に関連しての音声解説であるとか、動画を含めた展示解説の充実を合わせて図っていきたいと思います。それから展示企画としては、本年度同様に、山口県埋蔵文化財センターの巡回展を誘致し、地域展示のような、下関ならではの情報を付加する形での公開を図っていきたいと考えています。発掘速報展については、今年度同様にさわる展示を組み合わせることによって、下関の独自色を打ち出していきたいと考えています。それから「遺跡 de あーと～表現しよう古代の下関～」の開催ですが、今年度に引き続き第2回として、ブラッシュアップさせていきたいと考えております。

それから4番目、調査研究、綾羅木郷遺跡の関連する調査研究、基礎的な研究については、しっかりと計画的に深めていこうと考えているところであり、基礎研究の成果が平常展示のパッケージとして反映されていくよう、取り組みを進めたいと思います。それから、今年度から導入いたしますクラウド型収蔵品管理システムについては、有効に活用できるような環境づくりも含めて取り組みを進めたいと思います。それから、地域に根差した調査研究業務、関連する地域との連携を図りながら、下関市の綾羅木郷遺跡その他市内関連情報で、市内から外に情報が流れ、出ていってしまっているものもございますので、この周知も計画的に実施していきたいと思います。それから関連諸分野との連携、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムとの連携、継続的にやっております新潟大学の災害・復興科学研究所との連携、福井県立大学恐竜学研究所との連携等も具体的に手が掛っているものでございますので、これも計画的に実施していきたいと思います。それからユニバーサルミュージアムについての取り組みは、当面の当館の主要な事業となりますので、これまでの経験に基づき、課題を抽出しながら、より深めて参りたいと考えております。

それから教育普及業務につきましては、まだまだコロナ禍において、遠方から外部講師においでいただいて、講座を実施というのはなかなか環境として厳しいところです。今年度、先ほど木原委員からも、

お褒めいただきましたオンライン講座が、成功いたしましたので、そのような外部講師との交渉等についても意識をしながら進めて参りたいと思います。ご指摘がありましたオーバーワーク、マンパワー不足につきましては、講座や体験学習それから調査研究等、その他もろもろの博物館業務の中での全体のバランスというものを常に意識をしながら、どこに力点を置いていくのかということも、身の丈に合った形でのその取捨選択というのがどうしても必要になってくると思います。その中において、やはり将来を担う若手職員の養成というものも意識する必要があります。また、その他の子育て支援施設との連携、それから地域団体との連携については引き続き取り組みを進めます。インターネットを介した情報発信につきましては、せっかくの取り組みがありながら、その存在に気付いていただけていないという現実の問題があります。このため、SNS 等を活用した情報をきちんとお届けをして、下関市立考古博物館の存在を認知していただき、さらにそこに行ってみようと思っていただけるような魅力的な情報を発信していくということに努めていきたいと考えています。

大まかな取り組みの主旨としては以上でございます。

渡辺　ありがとうございました。引き続き、議案の２、「令和４年度の収支予算（案）について」、ご説明ください。

沖中　それでは令和 4 年度の収支予算案について説明させていただきます。資料の 24 ページと 25 ページをご覧になっていただければと思います。令和 4 年度市予算は、まだ可決されておりませんので、あくまでも案ということでご覧なっていただければと思います。

24 ページの表も 25 ページの表もいずれも 4 年度の当初予算額と 3 年度の当初予算額の比較という形になっております。その増減というのは、4 年度予算が 3 年度予算の当初予算に比べてどのようになったかというふうになっていますので、そのように見ていただければと思います。こちらのほうも、主なところをかいつまんで説明させていただきたいと思います。

まず 24 ページの歳入ですけれども、雑入の体験講座等参加費を 65 万円計上しておりまして、これは 4 年度は参加者が増えるのではないかということで増額となっております。国庫補助金の方は 100 万円計上しておりますけれども、これも 3 年度に引き続き史跡等及び埋蔵文化財公開活用事業費補助金が充てられておりまして、発掘速報展や触察用レプリカ管理事業へ充当されることとなっております。

25 ページの歳出予算案ですが、役務費の手数料に 61 万 5000 円を計上しておりますけれども、こちらが触察用金属造形レプリカ製作費の国庫補助となっております。それと、委託料が 3 年度に比べて高くなっておりますけれども、これは吸収式冷温水発生機改修費用の 500 万円を計上しております。これは考古博物館の大元となる設備でありまして、以前より経年劣化による部品の傷み等を指摘してされておりまして、4 年度で改修するということで計上しております。それと、備品購入費の 18 万 6000 円。3 年度には備品はあがっておりませんけれども、4 年度には 18 万 6000 円あがっておりますが、こちらは 3 次元モデリング撮影用デジタルカメラを計上しておりまして、今後さらにユニバーサルミュージアムについて推進していこうという考えによるものです。

以上です。

渡辺　ありがとうございました。令和４年度の事業計画案と収支予算案について、ご意見、ご質問があればお願いします。

ユニバーサルミュージアムというのが博物館活動の一つの新しい潮流だと思います。これは誰もが楽

しめる博物館ということだろうと思うのですが、現在は視覚障害者向けの「さわる展示」だとか、そういうことをやっておられるという理解でよろしいでしょうか。

濱崎　ユニバーサルデザインの取り組みの中で、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックというのが一つの契機になって、博物館利用者の中で特定のハンディキャップを持っておられる方が、実は一部の情報をが享受できていないのではないかということから考え直し、まず第一段階として抽出したのが、視覚に障害を持っておられる方々に対するフォローです。ただそれだけでユニバーサルデザインが完結するわけではありませんし、いろいろな意味合いで、より開かれた博物館活動を目指していくことは目標として認識しています。現状、第一段階としての取り組みが、視覚障害の方々に対してのフォローがどこまでできるのかということと、そこで得られた知見が、晴眼者に対してもより考古博物館の発信する情報の理解を深めていただくための手法として有効なんだということを示していこうという、その二つを合わせて進めていくという考え方で、取り組みを進めています。さらに発展的にはそれ以外の用途の利用者の方々も存在するということがありますので、適宜課題としてユニバーサルデザインとしての課題を設定しながら進めていくという考え方を持っています。

渡辺　ありがとうございます。何かご意見、ご質問ございますでしょうか。

田中　先ほどもお話がありましたが、くれぐれもオーバーワークにはお気をつけて頂きたいと思います。ほんとにこれだけの事業を展開されること自身は、敬服しておりますけれども、くれぐれも本館の考古博物館としての選択と集中と言うのでしょうか、そういうあるべき姿を出していただけたらと思います。

予算の関係のところで先ほど説明ございました、いわゆる水まわりというのでしょうか、500 万という大きな額が出ておりまして、今までの修繕の関係からいうと、そろそろ現状の更新というか、老朽化で 30 年くらいたってきますと水回りがどんどんいかれていきますし、それにかかる経費もものすごく大きな額になってくるんだろうと思います。当然、その方面のことも予想されておられるだろうと思いますけれども、事前に財政当局との折衝を進めていかれて、計画的にスムーズに進められていかれることを望みたいと思います。

渡辺　ありがとうございました。令和３年度の内容も含めてで結構ですので、何かございましたら、お願いします。

木原　以前、人面土器が実際に郷遺跡から出土したとき、多分木下尚子先生だと思うんですけど、掘ったばっかりの説明のときに手のひらにのせてもらったことがあるんですよね。今回それを３Ｄで触れるのを下に大きく作ってあって、やっぱりその時は人面土器の指紋のところを触ることができまして、本当に今コロナで皆さん子どもたちが来られないのが残念というくらい、やっぱり実際にそうものを用意して対応してくださっているので、ぜひ来てほしいなと、改めてお礼とともにありがたいなと思いました。

渡辺　ありがとうございます。今、４年度に計画されているレプリカ作成というのは具体的には何点ほどあるのでしょうか。というのは、予算が 62 万ほどで、通常のレプリカ作成に比べるとかなり安いので、この金額で何点ぐらいできるのか、ちょっと知りたいということです。

小林　　手数料としまして 61 万５千円ということですけど、これは具体的に申し上げますと、備品購入するデジタルカメラを使って、梶栗浜遺跡から出土した銅剣を撮影し、３次元データを作成して、それを山口県産業技術センターに依頼して、高精度で金属で 3D 出力できる機械を利用させていただき、作成する予定です。想定は、銅剣２本、蓋弓帽など、合計４点です。予算額は、これらの出力造形に要する経費の見積もり額となります。

渡辺　　わかりました。これ実際触ることができるものですのでどんどん事業として進めていただければいいですね。他にいかがでしょうか。

近藤　　事業計画の 1 番、基本的な考え方の 1 番目にあがっている、50 周年を経て、精神を風化させることなくという非常に大事なことを一番上にあげて、いいことだなと思うのですけれども、この時、私、高校生ぐらいで、その時に新聞にいつもなんかあったら綾羅木郷遺跡のことが一面に出たんですよね。市民もみな熱気に溢れて、すごい話題になったことなのですよ。でもそれを直に知っている人が年配になって、若い人、先生方も皆、その熱気を知らない人ばかりになっている。まず、すごく市民全体が盛り上がってそれで史跡指定までなったっていうことを、きちんと学校の先生に教えたりする事業の中でも、そういう精神を伝えてほしいなと強く思います。私も高校生のころに、発掘前の作業で上の土をのける時に人手が足らないから手伝ってくれって言われて手伝ったことがあって、そのころやっぱり市民皆さん、綾羅木の郷遺跡についてすごい関心を持っていました。そういう熱気をぜひ考古博物館の方あるいは文化財保護課の方が、いわゆる先生とか子供たちに伝えてほしいなという思いがあります。以上です。

渡辺　　ありがとうございました。大変大事なご指摘だと思います。山内先生、何か全体を通してございますでしょうか。

山内　　十分ここの学芸員の方は頑張って働けるんだと思いますけれども、今、学校の生徒さんたちはここへは来れていないのでしょうか。全く。

（発言者不明）　　来れてないです。

山内　　そうですか。1 クラスずつでしたら、なんか来れるような気がしたりするのですけれど、私のところの博物館は、出前授業に行っているんですけれど、近くの学校は来てくれるのですね。クラスを、全体ではなくてグループごとに分けて五月雨式に来てくれたりしますので、そういったことができないものかどうか。その点を先生に聞いてみたいなと思っていました。

渡辺　　いかがでしょうかね。

小戸　　今年度については、ほぼ社会見学等をやっている学校はないのではないかと思います。収まったかなと思ったらまたぶり返すというようなこと、それから、学校行事を体育祭であったり文化祭であったり、収まっている時期に集中して延期し、元々１学期とかあったものを２学期に集中して行っているという学校が多いと思いますので、その分社会見学であるとか、地域旅行とかいうのが削られているというのが現状じゃないかと思います。

渡辺　　ありがとうございます。

山内　　わかりました。

渡辺　　河波先生、全体を通していかがでしょうか。

河波　　田中先生がご心配のオーバーワークというのはいけないと思うのですが、だけどこれだけの内容を拝見しますと、職員、学芸員の方たちが生き生きと希望を持って仕事されているような気がいたしました。そして、このコロナの時期というのが本当にもう経験できないような、こういう時期ですし、子供の方にもまた感染者が増えたりなんかして、とんでもない状況ではありますけども、こういう時期を利用してちゃんと着実に時間を無駄にせずに調査研究されているということが、今日本当によくわかって、素晴らしいと思いました。とにかく、そういうことを情報発信していくということが、このコロナ禍が終わって、本当にまた輝いていくことができると思いました。

近藤先生がマスコミのことをおっしゃいましたけど、やっぱりなかなかキャッチしてくれないのですね。毎週、わりと文化的な部分に興味を持ってくれるので大丈夫ですけど、これも繰り返して情報発信していくことが必要だと思います。今とてもそういうこの館にかける情熱を皆さんに感じますので、ぜひこのトンネルを抜けるまでこの調子で考えていただきたいと思いました。

渡辺　　ありがとうございます。それでは、その他、事務局から何かございますでしょうか。特にございませんか。それでは少し時間が押しましたが、これをもちまして本日の協議事項はすべて終了いたしました。ここで、事務局の方にお返しします。よろしくお願いします。

小林　　ありがとうございました。それでは博物館協議会は以上をもちまして終了になりますが、最後に濱崎館長よりご挨拶を申し上げます。

濱崎　　皆さん、長時間にわたり大変ありがとうございました。オーバーワークの話は、毎度毎度耳が痛くなるお話として承るのですけれども、博物館には基本となる主要な柱となる仕事がございます。どの仕事一つ削ることもできない。その柱をすべて押しなべてというところで、どうしても効果的にやるべきことをこなしていくと業務量がだんだんと肥大化していってしまうというような現実があります。

今回いただきましたご意見につきましては、次年度計画の中にもう少し落とし込むような形で、また、年度当初の明確な年間の目標を策定するために十分に活用させていただきたいと思っております。情報発信がまだまだ課題だということは、共通の認識というふうに今回の話を伺って改めて感じいったところです。世の中の仕組みが大きく様変わりしておりますけども、こういう時代だからこそその地域の歴史・文化であるとか、博物館というものが、光輝いて将来に伝えられていくような十分な役割を果たしていくということが逆に求められている時代ではないかと考えているところです。引き続きご支援、ご助言をいただきながら、博物館活動が充実していくように、私どもも努めて参りたいと思いますので、引き続きよろしくお願いいたします。今日はどうもありがとうございました。

小林　　それでは以上をもちまして、令和３年度考古博物館協議会を終了させていたきます。

それから現在、「掘ったほ！下関 2021 改」を開催しております。「さわる展示」も展示してありますので、ぜひご覧になっていただければと思います。担当の中山学芸員がご案内いたします。

それから、会場左手に、令和４年度にオープン予定の「さわる展示」に関係するレプリカ製品をお見せできるようにしておりますので、こちらもご覧になっていただければと思います。

それでは本日はどうもありがとうございました。